本当の彼女と右手の恋人？現実と妄想と夢が行き交うHな体験♡二人に搾り取られる喜び♡

毒舌家の美人彼女と巨乳三つ編み委員長どちらがお好き？…セリフSS付きCG基本22枚＋差分！

さて…

これから僕、阿良々木暦が恋人関係である

戦場ヶ原ひたぎと初Hに至るまでのお話をしようと思う。

別に大した話ではない。

青春まっただ中の男女二人が初めてHするだけだ。

至って普通の話…よくある話…

……と思っていたのだが……。

戦場ヶ原ひたぎ…
僕と同い年で、同じクラスで、僕より少しだけ背が高くて、頭が良くて、毒舌家で、僕の彼女だ。
彼女とはクラスこそいっしょだったもののほぼまったく関わりのないままだった。
今年5月のあるきっかけを期に知り合い、そして付き合いはじめた。
付き合い始めて数ヶ月。キスこそ済ませたものの、それ以上には至っていない。
それは彼女が過去に下衆な男に乱暴された経験を持つためだ。
だからその事は事前に釘を差されているし、僕から「SEXしたい」だなんて
言えない。言えるわけもない。必然我慢の日々である。

「あら阿良々木くんなに？腐った魚みたいな目で私の事見ないでくれるかしら」
「あ…いやごめん別にちょっと考え事…」
「そう…ならいいけど。今日もお勉強よ？わかってる？」
「わかってるよ…」

頭のいい戦場ヶ原と同じ大学に行くために今は毎日勉強漬けの日々である。
学年トップクラスの戦場ヶ原と学年主席のある女の子にマンツーマンで勉強を教えて貰っている
このもう一人の女の子の事はもう少し後で話すとしよう。

いつもの様に勉強を終えるといきなり戦場ヶ原が…
「SEXします」
『。。。。。。。。。。。。。』
なにを言い出すんだこいつは…
「Hするって言ってるの。頭だけじゃなくて耳まで腐っているのかしら阿良々木くん」
「い…いや…なんだよそんな突然…いいのかよ戦場ヶ原は…」
「私が良いって言ってるんだから良いに決まってるじゃない…それとも嫌なの？」
「もちろん…う…嬉しい……けどさ…」

「でも今これからSEXしようって話ではないわ」
『・・・?』
「一週間後よ…まぁ私も心の準備とか色々あるし…
その間阿良々木くんに性的嫌がらせをしようと思って…」
……すごく嫌な予感がする。何をする気だこの娘さんは……。
「安心して…阿良々木くんが私の肉体無しでは生きては行けないぐらいには
身も心も嬲ってあげるつもりだから。期待しててね」
「!?…戦場ヶ原お前何する気な」
そう言いかけた瞬間ものすごい力で首根っこ引かれてベッドに座らせられる。

「ねぇ…阿良々木くん…なにをそんなに怯えているの…」
っていうか近い近い…む…胸も当たってるんですけど…
「あら…汗もかいているわ…ふふ…阿良々木くんの体って…すごく逞しくて素敵よね…」
戦場ヶ原の指先が僕の首筋から胸…お腹…そして下腹部へとするするとなぞるように滑り落ちていく。耳元で囁く戦場ヶ原の吐息が妙に熱く感じる…
ドッ
ドッ
ドッ
ムニ♥

「たった一週間よ…そしたら私を抱けるの…想像してみて…私の口も…胸も…手も…脚も…
そして膣も…私の処女マンコに阿良々木くんのおちんちんを好きなようにズボズボできるのよ…」
ハァ
ハァ
ハァ
ドッ
ドッ
ドッ
スリ。
スリ。
ピクン
いつの間にか勃起した僕の股間を指先で絶妙な力加減で弄ってくる。
「もちろん初めてのSEXは膣内出ししていいわ♥いっぱい溜めて金玉の中パンパンの
濃い精子を私の子宮目掛けて好きなだけ出していいわ…ほら…そう…想像して♥」

「あら…阿良々木くん動悸が荒くなってるわよ…
それにココ…先が湿ってきてる…♥」
戦場ヶ原の指が僕の勃起したモノを尿道や裏筋を的確に刺激する。
「阿良々木くんのココもう限界みたい…ドロドロに煮え滾ってる精子が出たがってるわ…
ほらどんどん昇ってくる…ココに神経を集中して…10…9…8…7…6…5…4…3…2……」
「あ…あ……戦場ヶ原…止め……」
ハァ
ハァ
ハァ
ドッ
ドッ
ドッ
クリュ
ピク
グリ
ピクン

「……1……ゼロ♥」
ドッ
ドッ
ドッ
ピシッ♥
ビクン
「ほらイキなさい♥」

「うう…」
戦場ヶ原の囁きと指だけであっさりと射精させられてしまった…。
「あらあら本当にパンツの中に出しちゃったのね阿良々木くん…
明日から私がじっくりと身も心も管理してあげるから楽しみにしてなさい♥」
「……」
ビクッ
ビクン
ガク
ガク
ブピュ
ドク
ドク
ドピッ
ビュク
ガク

「じゃあ阿良々木くん私行くけど…今日からオナニー禁止ね」
「ええっ！そ…それは」
「もし約束を破ったらあなたのその早漏ちんぽを切り落とすから♥」
ガハラさん…目がマジだ。
「わかったよ…約束する」
「そう…その方が身のためね」
明日から一週間か…どんな事をされるのだろう……気持ち悪い股間を気にしつつ…
言い知れぬ不安が心をよぎる。とりあえず童貞を捨てるまでは死ねない…な。

また次の日…勉強後…
「今日は阿良々木くんソワソワしてるように見えるけどどうしたのかしら…」
「う…いや別に…そんな事ないと思うけどなぁ(汗)」
「阿良々木くんドコ見てるの？ふふ…阿良々木くんが私の脚をいつもチラチラ見て興奮してるの知ってるのよ…超弩級の変態脚フェチだものね」
「見てないし！そんな事無ぇよ！」
「阿良々木くん別に私の前では紳士ぶらなくてもいいのよ。私はそんなド変態で家畜以下の阿良々木くんも見捨てないで愛してあげるから♥」
ギシ

「ふぐっ!?」
目にも留まらぬ早さで戦場ヶ原の足が僕の顔面に押し付けられる。
「嗅ぎなさい♥」
むあぁぁぁ♥
ムン
ムン
ドン
戦場ヶ原のおそらく一日履きっぱなしであろうニーソックスに
若干湿度の高い温かみのある足裏…そして足独特の匂いがフワッと香る。
「ほら豚のようにブヒブヒとしっかりと彼女様の足の匂いを
嗅ぐのよ…こういう事されたかったんでしょ?ほら♥」

容赦なく僕の顔面に足を擦りつける戦場ヶ原。
「私の足汗阿良々木くんの顔に塗ってあげる♥」
「う…むぐぐ…もご…○×▲□…」
むあぁぁぁ
グリ
ムレ
グリ
ムレ
グリ
「あらら…阿良々木くん彼女の足の匂いを嗅げてそんなに嬉しいのかしら?」
苦しい反面確かに興奮してる自分もいた。なんせあの戦場ヶ原の足の匂いだぜ?
「阿良々木くん…もしかして興奮してるの?股間がテント張ってるけど…
こんな臭い匂いで興奮するとかもう死んだほうがいいわね♥」
それにしても戦場ヶ原がものすごくノリノリだ…

ズボンだけ剥ぎ取られて。足を股間に勢いよく押し付けられる。
「ねぇ…こんなギンギンにチンポ勃起させてどういうつもり？
そんなに私の足の匂いで興奮したの？」
「こんなド変態を好きになるなんて一生の不覚だわ♥
でも大丈夫よそんな阿良々木くんでも見捨てたりしないわ
むしろ私が一生愛でてあげるから感謝なさい」
ドン
グリ
グリ

元陸上部のエースで今だに毎朝ジョギングしてるだけある
靭やかな脚でパンツの中の勃起したペニスを容赦なく足で扱く戦場ヶ原。
「戦場ヶ原…うああ…あ…あ…ちょっ…ちょっとま…」
「パンツの中で我慢汁がすごい事になってるわ阿良々木くん…
もう我慢できないの?こんなに足蹴にされてイッちゃうの?」
昨日もオナニーしてないし…僕は戦場ヶ原の足の匂いと足コキで
もう我慢の限界だった。このままではまたパンツの中に出してしまう…
「うう…ダメだイキそうだ…ま…まってくれ…せ…せめてパンツを脱がせて…」
「ダメよ阿良々木くんこのままパンツの中で射精なさい…
ほら…イケっ!」
シコ
シコ
シコ

「イクっっっ」
♥
「・・・・・・・・・♥」
ブピュ
ビュッ
ドプッ
ビクン
ビクン

「足で軽く擦られただけでパンツの中にお漏らししちゃうなんて
なんて情けない早漏野郎なのかしら…恥を知りなさい」
イッた後も扱くのを止めない戦場ケ原…
「イッた後も勃起したまんまなのだけは褒めてあげる♥
私が綺麗にしてあげるわ…阿良々木くんココに座りなさい」
グリ
グリ
ガク
ピュク
ビクン
ビュ
ビクッ
ガク

精子まみれのパンツを剥ぎ取られ僕のペニスが白日の下に晒される。
「阿良々木くんのオチンポやっぱり皮被りなのね…
想像通り過ぎて面白く無いわね…ちょっと皮の中覗いてみようかしら」
そう言いながら包皮を引っ張る戦場ヶ原。
ポロン♥
スッスッ
クイ
むあぁ
「恥垢がいっぱい溜まってるわ…ちゃんとおちんちんは
清潔にしないとダメよ…匂いも嗅いでみようかしら♥」
戦場ヶ原が僕のちんこに鼻を近接させて入念に匂いを嗅ぐ。
「止めてくれ戦場ヶ原っ!恥ずかしいからっ(汗)」
くそ。こいつ絶対わざとやってる!

「止めろ戦場ヶ原！今濡れティッシュで掃除を…」
「ダメよ阿良々木くん…そんな事許さないわ…忘れたの？
私はあなたが全身汚物まみれでも躊躇なく抱擁できるぐらい愛しているの…
それに阿良々木くんが羞恥に悶えてる姿はとても萌えるわ…うふふ♥」
やっぱりわざとか！ちくしょう！
クチュ
「じゃあこのチンカス私が掃除してあげるわね…喜びなさい♥
彼女様に自分の精子とチンカスまみれのおちんちんを
ペロペロとお掃除してもらえるなんて至福でしょう♥」

戦場ヶ原の舌先が包皮と亀頭の間に侵入してくる。
戦場ヶ原には一切の躊躇がない。
「ん…♥」
亀頭裏にこびり付いてる恥垢を次々と
こそげ取るように舐めとっていく…
普段表に出ない敏感な部位を戦場ヶ原の舌が
ヌメヌメと這いずりまわる
にゅるる

カリ首のぐるりをクルクルと重点的に責められて腰が抜けそうになる。
そしてさっき出してから数分しか経ってないのにもう限界に近づいてしまう。
それを察したのか戦場ヶ原が不敵な笑みを浮かべる。
ニチュ
ニュルル
「いいわよ我慢しないで。彼女に汚チンポ掃除してもらいながら
不様に射精する瞬間を私が見ててあげる♥…ほあ…イヒなはい♥」

「出るっっ！」
ビュルルッ
ドピュッ
ビュッ

「これじゃせっかく綺麗にしてあげたのに…意味が無いじゃない…
こんなに出してどういう事？なんてこらえ性の無いチンポかしら
やっぱり私がキチンと粛清してあげないとダメなようね…」
そう言いながら顔にかかってしまった精子を舐めとっていく戦場ヶ原。
ビクン
ビクン
「次は上も脱いでベッドに横になりなさい…」
まだ終わらす気は無いらしい…戦場ヶ原の言うとおりに
上着を脱いで裸になりベッドに横たわる。
今度は何をする気だ……

裸になってベッドに横になるとペニスが温かい粘膜に包まれる。
戦場ヶ原の口の中…さっきの舌先の刺激とはまったく違う快感が襲う。
この刺激でまた硬さを取り戻していく。
っつーかこの人本当に処女なのだろうか?巧過ぎる…
「私のフェラチオはどうかしら?」
「す…凄い気持ちいい…よ」
そうか…僕今あの戦場ヶ原ひたぎにフェラされてるんだ…
カポ♥
ん♥
「じゃあもっとサービスしてあげるわ阿良々木くん」
……?

「ふんぐっ！！！」
突如として僕の呼吸器全体が塞がれる…
しかし必死に鼻で呼吸しようとすると
先ほど嗅いだ匂いが鼻孔を突き抜ける…
口も塞がれて鼻で呼吸するしかない…
否が応でも戦場ヶ原の蒸れた
足の匂いが入ってくる。
ドン
「阿良々木くんは大好きな私の足の
匂いでもブヒブヒ嗅いでなさい
ついでに乳首も弄ってあげるわ♥」
「ふん……うんぐ…っ…っ…むぐぐ…」
同時に乳首も刺激してくる。
その間もフェラの刺激が
止むことがない。
3点同時に責められて
一気に快感がシナプスを
駆け上ってくる。

イキそうなのを伝えたいが足で口を塞がれているのでそれができない…
「むぐぅっ！ん～～～ん～～～～」
それを察したのか戦場ヶ原の口の動きも一気に加速する。
僕の脳内も戦場ヶ原の足の匂いで支配されたようにクラクラする…いや…これ僕酸欠してねぇか？
「んっ♥んっ♥んっ♥」
もうイク…イッてしまう…
ムン
ムン
グリ
グリ
グリ
グリ
ゲポッ
ゲポッ
スー
フー

「ん～～～～～っ!!!」
ドピュッ
ビュルルッ
ドピュッ

戦場ヶ原の足の匂いに
包まれながら…口内射精。
3度目とは思えない量の精子を
口の中にぶち撒ける。
それを戦場ヶ原は次々と
喉を鳴らして飲み込んで行く。
尿道に残った最後の精液も
ストローのようにして
吸い取られていく。
こうしてやっと今日の分の
戦場ヶ原の言う――
「性的嫌がらせ」が終わった。
本番までの道は長い…
ん♡
ん♡
ゴクゴク
クリ
クリ

戦場ヶ原に射精管理中の僕だが、思春期の男児らしく
僕も御多分にもれず普段はオナニーをする。
そのオカズはもっぱら一人の女の子がメインである。
戦場ヶ原は大好きだし、将来結婚したいとも思ってるけども
アレはアレ…コレはコレ。
その女の子は戦場ヶ原と代わりばんこに僕の家庭教師を
してもらっている女の子なんだけど…
その子と僕のエロい妄想の話をしようじゃないか。

羽川翼…僕や戦場ヶ原と同じクラスで性格は真面目で品行方正で学年主席の秀才で委員長の中の委員長でそして僕の命の恩人だ。
今は関係無いので割愛するが以前に僕が死にかけた時、命を賭して助けてくれた。

その後僕は羽川に恋してるのかと思った時期もあったけど、でも僕はただ単にエロい目で見ていただけだったみたいだ。いや憧れや崇拝に近いかな…。
とにかく僕の中で特別な存在なのは間違いない。
その彼女に今は勉強を教えて貰ってる。

「阿良々木くん今日の勉強はおしまい…私行くけどいつもどおり予習・復習しとく事
戦場ヶ原さんにも迷惑かけないようにね…」
ゆさぁ
「わかってるよ羽川…今日もありがとうな」
こんなに可愛くて、しかも僕が人生で出会った女性の中で一番おっぱいの大きい
エロく豊満な肉体の持ち主が間近で僕に勉強を教えてくれてるんだぜ？
そりゃエロい気持ちにならない方がおかしいだろ？

羽川に勉強を教えて貰った後はいつも羽川を想ってオナニー三昧だ。
羽川の色んなエロい妄想をしまくる。
オナニー禁止中だけど……戦場ヶ原には悪いけどでもわかりゃしないよな？
タダでさえあんなHな事されて悶々としてるんだし。
僕の日課である羽川をオカズにオナニー。
ふふふ…誰も僕の妄想を止める事は出来ないのだ！
例えば…こんな妄想を……

阿良々木くん…また私でオナニーする気なの？
毎日私をオカズにして飽きないの？ふーん…
阿良々木くんはいつもどんな風にシコシコしてるのかなぁ…
ほら恥ずかしがってないで…おちんちん出して…
私に見せてみて…♥

あは♥阿良々木くんのおちんちん皮被ってるんだね。可愛い♥
もう勃起してるの？見られてるだけでおちんちん勃起してるんだ♥
じー♥
同級生にホーケーおちんちん見られて興奮してるんだ？
いいよぉ変態の阿良々木くん。私がしっかり見ててあげるから
シコシコしてみてごらん♥
ポロン

シコシコ気持ちいい？うわぁ…すごいね…
先から出てるのカウパー氏腺液ってやつかな…
え？もう出そうなの？包茎な上に早漏なんだね阿良々木くん。

うん…いいよ…私が阿良々木くんの射精する所見ててあげるから
好きなだけ出して…
私に精子出るとこ見せてみて♥

ドピュッ
ドピュッ
ドプッ

いっぱい出たね。熱々の精子顔まで飛んで来ちゃった…
元気良すぎだよ阿良々木くんのおちんちん…
そんなに私に見られながらオナニーするのが気持ちよかったの？
え？今度はおちんちん弄って欲しいの？
もう…しょうがないなぁ…阿良々木くんは♥
ん♥
ビクン
ビクッ

阿良々木くんすごい勃起してるけど…
そんなに弄ってもらいたかったの？
え？ダーメ♥直接シコシコしちゃったら
早漏の阿良々木くんは
すぐにイッちゃうでしょ？
ほら…指先で…スリスリ～って…♥
すごい気持ち良さそうに
おちんちん反応してるよ…
スリ
スリ
スリ
ビクン

先っちょがすごいヌメヌメしてきた♥
阿良々木くんが勉強中に勃起してるの
知ってるんだからね…ダメだよぉ…
ココが尿道かな…ほらほら…
ビクンビクンっておちんちんが
「気持ちいいよぉ」って
言ってるみたい♥
ほら…睾丸から精子がこみ上げてくるよ…
ほら…来ちゃう…来ちゃう…
精子がすごい外に出たがってる♥
いいよ阿良々木くん…
私に指でイジられて
イッちゃいなさい♥
クッ
クッ
ビクッ
スッ
ビクッ

ドピュ
ビクン
ブピュ
ドピッ
ビクン

あは♥本当に指だけで射精しちゃったね♥
パンツから精子溢れちゃってるよぉ…
阿良々木くん気持ちよかった？
そんなに指先で弄ってもらうのが良かったの？
変態さんだなぁ阿良々木くんは…
♥
次はどうしてもらいたいの？
え―……おっぱい？
そんなにおっぱいでしてほしいの？
しょうがないなぁ…
今日は特別だよ♥
ドク
ドク
ドク
ドク

うん…そう…そのまま腰突き出して…
ほら阿良々木くんのおちんちん入ってくよ♥
いいよ…そのまま動いてみて…
私のおっぱいで好きなように
おちんちん気持ちよく
なっていいんだよ♥
ダプ
ズププ

そう…最初はゆっくり出し入れしてみて…
どう？私のおっぱいの中…
阿良々木くんのおちんちん
中ですっごく
熱くなってきてる…
タポ♥
タポ♥
にゅぷぷ♥

んん♥…すごい勢い…
おっぱいとSEXしてるみたいだね♥
出そうなの？いいよ♥
私のおっぱいの中に好きなだけ
阿良々木くんの精子
どぴゅどぴゅって出してみて
全部受け止めてあげるから…♥
パン
パン
パン
ニュプ
クチッ

熱っ♥すごい出てる♥
おっぱいの中で
おちんちんが
ビクンビクン
脈打って
跳ね回ってる♥
あん♥
ドピュ
ブピュ
ドプッ
カク
カク
ピュク
プピュ
トプ

乳内射精気持ちよかった？
ふふ♥そんなに褒めてもなにも出ないゾ♥
プルプルの濃い精子が
おっぱいから溢れてきちゃう…
これじゃ阿良々木くんの精子で
おっぱいが妊娠しちゃうよ♥
ビクン
トプ
トプ
ビクン
プル
プル

ねぇ阿良々木くん…
私の顔でシコシコしてもらいたいなんて
どういうことかな？今日はホント特別サービスだよ…。
ん…阿良々木くんのおちんちん暖かい…
すごく脈打ってるのがわかるよ♥
ギュむ♥
ビク
ゴシ…
ギュ♥
ビク
うん…
私の顔でおちんちんシコシコ擦りつけて
気持ち良くしてあげる♥

ほら…私の頬でおちんちんゴシゴシ…シコシコ…
もう我慢汁が顔にいっぱい塗られてヌルヌルしてきたよ♥
もう出そう？出そうなの？
私の顔で包茎おちんちん擦ってもらって射精しちゃうの？
このまま私の顔にいっぱいぶっかけたいんでしょ？
いいよ♥私の顔コキで
いっぱい出しちゃいなさい♥
ん♥
ゴシ
ギュ
ゴシ
にゅる
ゴシ
シコ
シコ

んんっ♥
ドピュッ
ブピュ
ビュー
ドク
ドク

やんっ♥阿良々木くんのおちんちん
すっごい暴れてるよぉ♥
おちんちんがビクンビクンって
頬に打ち付けてる…
私の顔でシコシコしてドピュドピュって
するの気持ちよかった？
精子いっぱい顔にかかちゃった♥
熱々のプルプルだね♥
ん♥
ビク
ビク
ビク
ビクン
ビクン

あん♥おっぱいチュッチュしながら赤ちゃんみたいに甘やかしてほしいの？もう…しょうがないなぁ♥ほら僕ちゃんの好きなママのおっぱいでちゅよ～好きなだけチュッチュしていいんだよぉ…♥よしよし…ぱいぱいおいしい？うん…おいしいねぇ…♥
チュ
チュ
ん…♥Hな赤ちゃんねぇ…そんな吸い方されたらママ感じちゃうよぉ…いい子いい子…♥ん？なに？おちんちんがムズムズするの？そっか…大丈夫怖がらないで…ママが診てあげる…
プルン♥

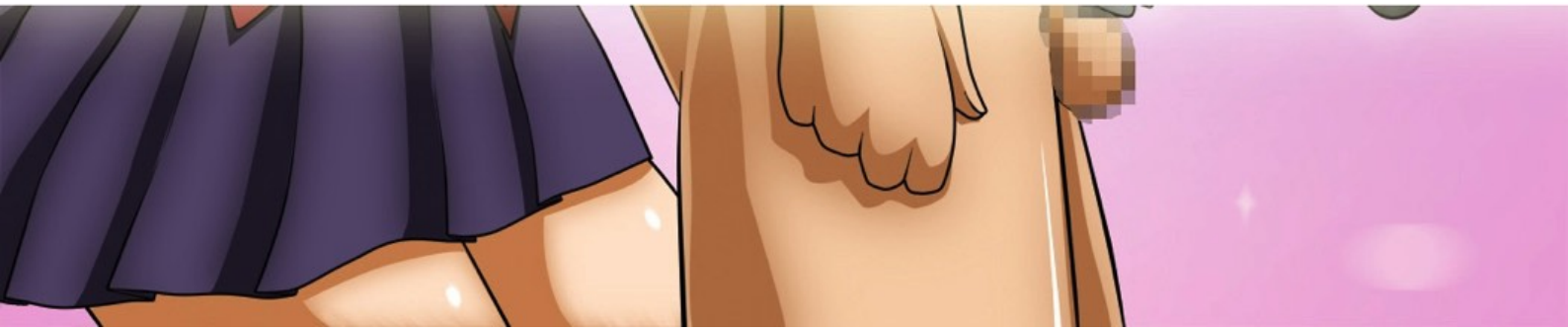
そっかおちんちんオッキしちゃったね…
大丈夫ママが優しくいい子いい子して
治めてあげるから
溜まってるモノは
出しちゃいましょうね。
痛くしないから大丈夫でちゅよ…
もう…ワンパクちゃんなおちんちんね…
じゃあママがシコシコしてあげるから
僕ちゃんはそのままぱいぱいチュッチュ
してててください。
おちんちん気持ち良くなろうね♥
チュ
チュ
ビク
キュ
ビク

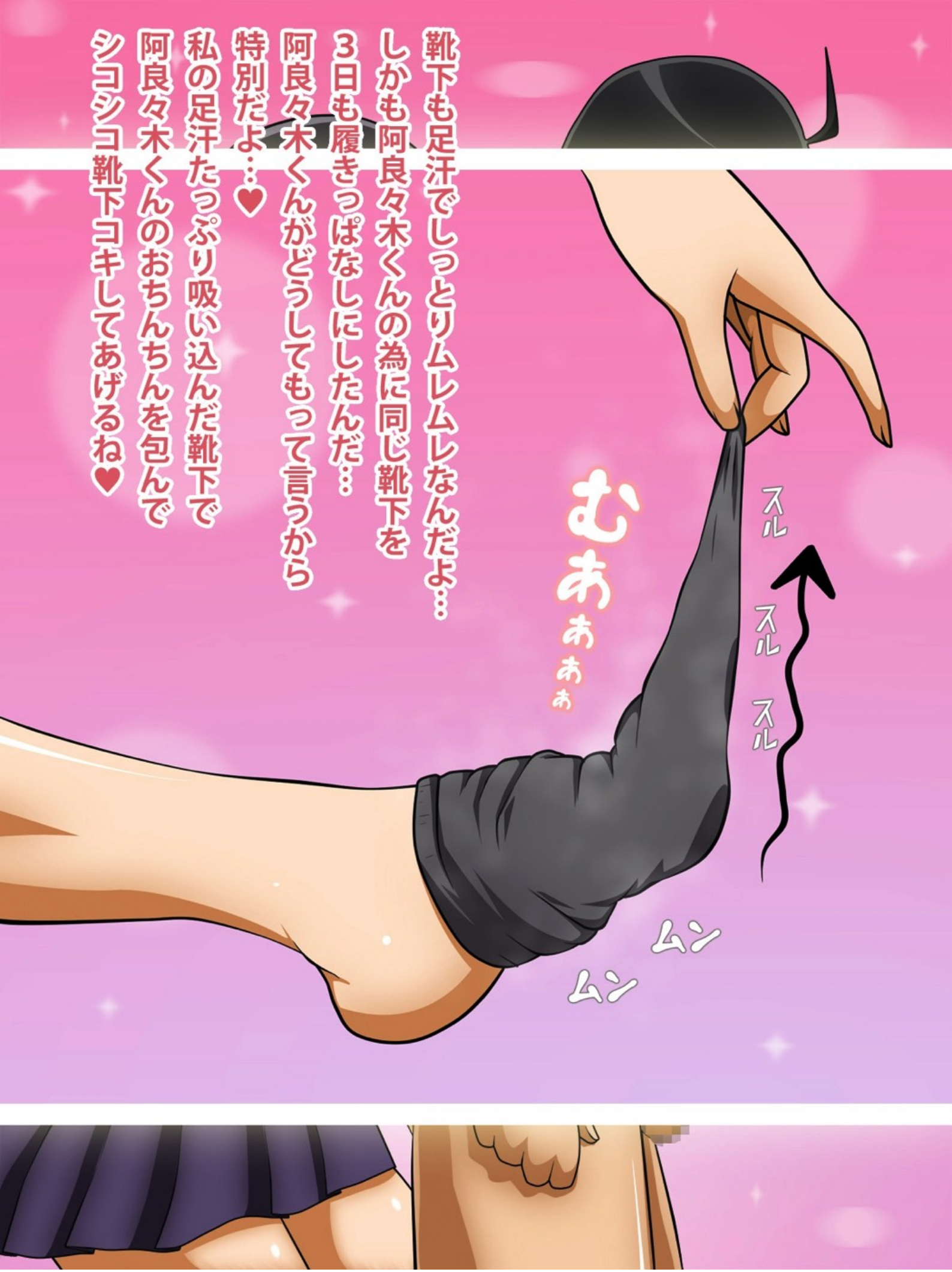
はーいシコシコ♥
うん…そうだねぇ…気持ちいいねぇ…
こうやってシコシコすると
タマタマの中から白いのが
出たがるの…そう…
それを出すとすっごく
気持ち良くなるからねぇ…
だから頑張って白い
いっぱい出ちましょうねぇ…
ほら…シコシコ…シコシコ…
気持ちいい気持ちいい…
ほらどんどん白いのが出たいよーって
昇ってくるよぉ…大丈夫ママが全部
受け止めてあげるから…
我慢しないでママのシコシコで
ピュッピュしちゃいなさい♥
シコ
シコ
シコ
?
?

はい♥
ピュッピュ♥
出てる出てる♥
はい全部出ちましょうねぇ…
全部出ちてちんちん
スッキリしましょうねぇ…
はーい♥
絞りとっていきまちゅよ～
ぴゅくぴゅく…ピュッピュ～
気持ちいいねぇ♥
ドピュッ
ビクッ
ビュルルッ

はーい♥いっぱい出まちたねぇ♥
えらいえらい♥頑張りまちたねぇ…
ママのぱいぱいチューチューしながら
シコシコされるの
気持ち良かったかなぁ？
いいよそのままチュッチュ
してていいんだよ…
ママがオチンチン綺麗綺麗に
してあげるからね…
僕ちゃんが気持ちよくなってくれて
ママ嬉しいなぁ…うふふ♥
いい子いい子…♥
ビクン
ビクン
チュ
チュ
スリ
スリ

じゃあ次は阿良々木くんの大好きな事ね…
私こう見えてすごい汗っかきだから足汗もすごいんだ…
一日中履いたローファーの中靴下から滲みだした足汗で
ビチョビチョになるぐらい…しかもこのローファー
2年ぐらい履き続けてるから凄い中臭いんだ…




靴下も足汗でしっとりムレムレなんだよ…
しかも阿良々木くんの為に同じ靴下を
3日も履きっぱなしにしたんだ…
阿良々木くんがどうしてもって言うから
特別だよ…♥
私の足汗たっぷり吸い込んだ靴下で
阿良々木くんのおちんちんを包んで
シコシコ靴下コキしてあげるね♥
むぁぁぁぁ
スル
スル
スル
スル
ムン
ムン

ほら靴の匂い嗅いで♥
オチンチンは靴下で包んで…
ほら…靴下足汗でしっとりしてるでしょ？
阿良々木くんのおちんちんビクンビクンって
すっごい反応してるよ♥
ムン
ムン
むあぁっ
ムニュ♥
スルスル
ムレ
ムレ

靴の中の匂い嗅ぎながら靴下コキでシコシコ気持ちいい？
臭い？気が遠くなりそうでしょ？
恥ずかしいなぁ…でもそんな私の恥ずかしい
足の匂いで興奮する阿良々木くんは変態さんだねぇ♥
はっ
はっ
ムン
ムン
シコ
シコ
プル
プル
シコ
シコ

もう出そうなの？このまま靴下の中に出しちゃおっか♥
はっ
はっ
はっ
ムン
ムン
ブル
ブル
シコ
シコ
シコ
ブル
汗だくローファーの匂いオカズに靴下コキで
いっぱいドピュドピュするよ？
ほら♥足のくっさい匂いに包まれてイっちゃいなさい♥

はい♥射精♥
いいよ出して出して…私の靴下の中にいっぱい出して♥
くっさい匂いで好きなだけドピュドピュしてぇ♥
ドプッ
ビュルルッ
ブピュ
ガク
ガク
ブル
ブル
ガク

あはは♥本当に出ちゃったね…そんな私の靴の匂い良かった？
靴下の中阿良々木くんの精子でいっぱい♥
あーダメだよぉ…イってもっと匂い嗅ぎ続けて♥
軽く痙攣してるみたいだけど気絶しないようにね♥
プル
ビク
ビク
プル
タプタプ

ワキの匂いも嗅ぎたいの？足の匂いじゃ足りない？
いいよ…汗だくのワキの匂い嗅いでみる？
でも本当すごい匂いだと思うから覚悟してね…
ほらどうぞ…私の汗だくムレムレのワキマンコだよ
好きなだけ嗅いでみて♥
ドキ
ムン
ムン
むわぁぁぁ
ムン
ムン
ドキ
ムン
ムン
ドキ

わわ…近いよう
阿良々木くん…
あん♥そんな鼻近づけてクンクンしちゃうの？
もう…本当はすごく恥ずかしいんだからね…
阿良々木くんは変態過ぎぃ…
どんな匂い？ツンとする匂い？クラっとする？
ドキ
ムン
ハァ
クンクン
むぁぁぁ

嘘…阿良々木くん勃起してるの？
私の汗だくのワキ臭とか体臭嗅いでおちんちん勃起させてるの？
もう…さりげなくおっぱいも触ってるし…ワキの匂いオカズにオナニーしたい？
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ムン
ムン
ムン
ムン
ムン
ハァ
ハァ
ハァ
ビク
ビク

こんな臭い匂いでおちんちんシコシコしちゃってる…
もう出ちゃうの？いいよ…
私の汗だくのワキ臭オカズに
ピュッピュして♥
ドキ
ムン
ハァ
クン
むあぁぁぁ
シコ

やんっ♥
うっ
スゥゥゥゥゥ
ドピュッ
ビュルルッ
ビュッ
すごいいっぱい出てる…
ホントにこんな臭いワキの匂いでイっちゃってる…♥

プルプルの精子太ももにいっぱいかかちゃった…♥
もう…ほんとに私の体臭嗅いで射精しちゃうんだね…
他の女の子にこんな事お願いしちゃダメだよ？変態過ぎて嫌われちゃうよぉ…
ハァ
ハァ
ハァ
ビク
ビクン

阿良々木くん戦場ヶ原さんと
ついにHする約束したんだってね…
でもダメ…阿良々木くんの童貞は私が貰うわ…
戦場ヶ原さんから射精管理されてるんでしょ？
今私が楽にしてあげる…♥
抵抗したって無駄なんだから…
ほらほら～童貞ちんちんが私の膣内に
入っていっちゃうよぉ…いいのかなぁ…
ん♥
ざーんねん♥入っちゃった♥
阿良々木くんの童貞は私のモノ♥
戦場ヶ原さんには悪いけど
阿良々木くんの筆おろしは
私がするって決めてたのぉ♥
どうかな？女の子の膣内は…
暖かい？気持ちいい？
じゃぁ…動くよ？
すぐにイっちゃダメだよ？
ズズズ
ビクッ
ビクッ

最初はゆっくり…
阿良々木くんの
おちんちんを射精まで
導いてあげるね…
戦場ヶ原さんの為に
大事に取っておいた貞操を
取られちゃった気分はどうかな？
でも私の方が阿良々木くんを
想う気持ちは強いからいいよね♥
阿良々木くんのおちんちん
気持ちいいよ…
相性がすごく良いみたい…♥
ふ♡
ふ♡
プルン
プル
トン
トン
トン

実…はね…ハァハァ…
今日すっごい
危険日
なんだ…ん…んっ…
たぶん膣内に
出されたら一発で赤ちゃん
出来ちゃうと思う。
はっ♥
はっ♥
はっ♥
たぷ♥
たぷ♥
私の子宮も降りてきたみたい…
子宮口に阿良々木くんの
おちんちんの先がキスしてる…
ねぇ…いいよね？
私と赤ちゃん作ろ？♥
パン
パン
パン
チュ♥
チュ♥

あんっ♥あんっ♥あんっ♥
あっ…阿良々木くん…
もうイキそう?出ちゃいそう?
いいよ…はぁ…わ…私…の…
危険日マンコの中に…
好きなだけ射精して…♥
私もいっしょにイクから…
来てっ阿良々木くんっ!
私が阿良々木くんの精子…
全部受け止めて
受精してあげるからっ!
膣内にいっぱい射精して
私を妊ませてっ!!♥
あん♥
イク♥
あ♥
イクッ♥
あ♥
あん♥
たぷ♥
たぷ♥
パン
パン
パン
パン
キュン♥
キュン♥

イクっ♥イクっ♥
ああっっっ♥♥♥
〜〜〜〜〜〜〜っ♥
っ♥っ♥っ♥
出てるっ♥
阿良々木くんの精子っ♥♥
私の膣内にどんどん
入ってきてるぅぅ♥
あっあっ…っっ♥♥♥
ブル
ガク
キュン
トプ
ビュー
ビュルッ
ビュルルッ

はぁ…はぁ…いっぱい出たね…♥
膣内に入りきらないぐらい…
これは絶対赤ちゃん出来ちゃったなぁ…
私…今…阿良々木くんの精子…
受精してる…
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
はぁ♥
これで阿良々木くんは
私のモノだね…
いっしょに赤ちゃん育てよう♥
はぁ…はぁ…
阿良々木くん…好きだよ…♥
タプ
タプ
ドク
ドク
ビクン
ビクン
ガクガク
ガクガク

はぁ…はぁ…
おっと…妄想が白熱し過ぎたか…
どれもこれも超エロい羽川が悪いんだ…
あんな大きいおっぱいを目の前で
ゆさゆさとしながら間近で
勉強教えて貰ってる身にも
なってくれってんだ…
悶々として勉強なんか
手に付かないってのの
というかオナニー禁止中なのに
どんだけヌイてんだ俺…
戦場ヶ原にバレたら殺される…

次の日ー
「阿良々木くん昨日私に黙ってオナニーしたわね」
ギクリという効果音が聞こえる程に動揺する
「な…なんの事だ戦場ヶ原…僕がオナニーするわけ…」
「ゴミ箱に精子臭いティッシュがいっぱい捨ててあるわよ?」
「・・・・・・。」
全身から滝のような汗が吹き出す
「あ…いや…あの……」
ああ…マジで僕は今日殺されるかもしれない。
「あれほど釘を差したのに我慢できないなんて
阿良々木くん…これは切り落とすしかないかしら」
「え……な…なに…を……?」
「四股を」
うおーーーいそっちか!チンコじゃないんだ!
情状酌量の余地が微塵もない!!
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ピキ

身包み剥がされて床に叩きつけられる
「ねぇ…阿良々木くん
このこらえ性のない
童貞早漏包茎チンポが
悪いのかしら！」
「ぐあっっ！」
僕の急所に戦場ヶ原の足が
襲いかかる。
「戦場ヶ原！潰れる！潰れる！
つぶれちゃうううぅ！」
悶える僕を押さえつけるように
容赦なく踏み潰す戦場ヶ原
ドン！

捨てたタバコを踏みつぶすように
僕のペニスを踏みにじる
ゴゴゴ
ゴ
ゴゴ
「なかなか潰れないわねコレ
ゴキブリ並にしぶといわ…」
「戦場ヶ原…ゆ…ゆるして！
もう…しない…からぁぁ」
「ゴキブリがなにやら
キーキー鳴いてるわね
早く潰れないかしら」
「死ぬぅぅぅぅぅっっっ
ぅぐあぁぁぁぁぁぁぁ
○×▲□▽☒～～～～」
「潰れなさい」
グリ
グリ
グリ
グリ

射精。
僕の生殖機能が最後に
子孫をなんとか残そうと
したのか…わからないけど
僕は射精した。
……
走馬灯をリアルに
初めて見た瞬間だった…。
ドピュッ
ドピュッ

イった後も容赦無く踏み続ける戦場ヶ原
「あら…これだけイジメて
あげたのに射精するなんて
いい度胸ね阿良々木くん」
「…ごめん戦場ヶ原…
ど…どうしても悶々として…
魔が差したんだ…許してくれ…」
「…そんなにオナニーが好きなら
好きなだけさせてあげようかしら」
……それはどういう…??
グリ
グリ
グリ
ビクッ
ビクン

「顔上げなさい阿良々木くん…」
ドン
ムン
ムン
ムン
ムン
ふおぉぉ…戦場ヶ原のパンツが…股間が…太ももがっ！

「ふぬぐっっっ！」
戦場ヶ原の股間が僕の顔に襲いかかる
こ…呼吸が……
「ほら…どうかしら私のスカートの中身…
蒸れて汗かいてるから素敵な匂いがするでしょう？」
戦場ヶ原の体重が頸椎にメキメキとダメージを与える
やっぱりまだお怒りは治まってはいないようだ。
ドン
メキ

「そんなにオナニーしたいなら私の股間をオカズにしなさい…
彼女様の股間の匂いを生オカズにできるなんて
この上無い喜びでしょう阿良々木くん…」
「んご…死…ひぬ…○×▲□…」
「死ぬ？はんっ…彼女様の股間に
包まれて死ぬなら本望でしょう？
遠慮無く死になさい…このゴミクズ」
戦場ヶ原の恥丘やお尻の肉が丁度僕の鼻と口に
フィットして絶妙な感触と汗と女の子の匂いが
ダイレクトに脳を刺激する。
グリ
グリ
グリ
ギシ
ギシ
ビクン
ビクン
ピク
ピク
ピク
ピク

「あら…そんな風に昨日もオナニーしたのかしら？
包茎チンポ握って必死にシコシコしちゃって…
不様で滑稽ねド変態の阿良々木くん…」
「むご…もご…んん…んんん」
「もうイキそう？別にいいけど…もしイクなら
『戦場ヶ原様ありがとうございます』って
三回唱えてからイキなさい！ほらイケっ！」
グリ
グリ
グリ
グリ
シコ
シコ
シコ
ピク
ピク
ピク
ピク

「～～～っっっ！」
朦朧とした意識の中
戦場ヶ原の股間の匂いに
包まれながら射精する。
ドピュッ
ビュルルッ
ビクン
ビクン

「あら…まだ息してるわね…阿良々木くん」
「むぐぐ…ふー…ふー……」
「まだ生きてるなら次のお仕置きは何にしようかしらね…」
俺が息絶えるまで絞りとる気なのだろうか？
「そうねぇ…そこに犬のように四つん這いになりなさい」
ああ…今度はなにをする気なんだ…絶対ろくな事じゃないのは確かだと思うけど…
グリ
グリ
グリ
グリ
ビク
ビク
ビクン
ピク
ピク
ピク
ピク

戦場ヶ原に四つん這いにさせられる。
「ガハラさん…これ…なに…」
「黙れクズ。口ごたえ出来る立場だと思ってるのかしら?」
「……は…はい…すいません…」
そう言うと僕のお尻に
指を這わしはじめる戦場ヶ原。
「お尻の穴がヒクヒクしてるわ阿良々木くん…」
な…なにをする…気…
ヒク
ヒク
プル プル

「ああっ！」
僕のお尻の中に戦場ヶ原の指が一気に侵入してくる。
「そ…そこは許し…」
「黙れブタ…ブヒブヒうるさい…大人しくしなさい
あらあら…どんどん奥まで入っていくわねぇ…」
ズプププッ
プル プル
ビクッ
プル プル

「阿良々木くん…チンポの童貞よりアナル童貞の卒業が先になったわね泣いて喜びなさい…」
戦場ヶ原の指の動きが加速して僕のお尻の中をこねくり回す。
「あああ…もうヤバイって戦場ヶ原！」
「アナルの中を指で犯されてイク気なの？」
「イクイクイクっ！」
「どうしようもない早漏クズチンポね…アナル指で弄られてイキなさいこの豚！」
ズプ
グプ
ズプッ
ガクガク
シコ
シコ
シコ
ガク
ガク

「イ…イクっっ！」
お尻の中を弄られて
あっけなくイッてしまう僕…
「ふふふ♥阿良々木くんお尻の中がキュンキュン反応してるわよ？
そんなにアナルほじられながら射精するのが気持ち良いのかしら？」
コリ
コリ
ドピュッ
ブピュ
ガクガク
ガクガク

「戦場ヶ原死んじゃう…本当に僕死んじゃうよ…
ゆるして…もう絶対しないから…」
「彼女様にアナルほじられて
あっけなくイッたくせに
何偉そうな事いってるのかしら…
このクズチンポ野郎
まだ喋る元気があるじゃない」
まだ許されないらしい…はぁ…
もうここまで来たならどうにでもしてくれ…
プル プル
ビクン
ビクン
プル プル
プル プル

「アナルがえらく気に入ったみたいだから
もっと開発してあげる…
アナルだけで絶頂できるように
私が躾けてあげるわ」
「ま…まって…うっ」
はぁ
はぁ
はぁ
クリ
ガク ガク
ビン
ビキキ
ズプッ
ガク ガク
有無を言わさずまた僕のお尻を弄り始める
同時にに乳首も的確に刺激してくる戦場ヶ原
強制的に勃起状態に戻らされる…
でも今回竿には一切触れられない…

しかもそのまま10分…30分…1時間と…
アナルと乳首だけ弄り続けられる。
竿に触れられれば
一瞬にしてイケそうなのに…
意識が朦朧とする
全身の神経が
戦場ヶ原に
支配される感覚…
はっ
はっ
はっ
はっ
グリ
グリ
グリ
ガク
ガク
ビクン
ビクン
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
ガク
ガク
「お願いだ…し…しごいて…
頭が…頭が…おかしくなる…」
「ダメよ…アナルだけで絶頂するのよ
お尻だけでイク不様な情けない姿
私が見ててあげる…さぁイキなさい」

「～～～～～っっっっ！」
ビクン
ビクン
ガク ガク
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
くちゅ
くちゅ
ガク ガク
ビクン
本当にお尻を弄られただけでイってしまった…らしい…
この時の記憶はもはや曖昧だったが…。

「あらさすがに限界だったみたいね…
気を失う前に言っておくけど
『次』は無いわよ…
心しておきなさい阿良々木くん…」
その言葉を聞いて朦朧とする意識の中
僕は心から二度と黙ってオナニーは
しないと心に誓いながら気を失った…。
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビュッ
ビタ
ビタ

気絶し意識を失った中…
僕は不思議な夢を見た。
おそらくここ数日の体験が
引き起こしたものだと思う。
その夢には戦場ヶ原と羽川が
二人共出てくる夢だった…

ほら…阿良々木くん…大好きな足汗たっぷりのソックス足だよ？
戦場ヶ原さんとどっちがいい匂いするか嗅いでみて♥
むん♥
むん♥
あら阿良々木くん遠慮しなくていいのよ…大丈夫…
心配しなくてもすっごく臭いから。さぁ嗅ぎなさい
むん♥
むん♥
むん♥
ドン♥

ほら…まずは私の匂いを嗅いでみて…どう？臭い？
阿良々木くんの為に3日もソックス履いたままにしたんだよ？
次は私の匂いを嗅ぎなさい阿良々木くん…ほらどうなの？
しっとりムレムレでしょう？どっちが臭いの？答えなさい。
ムレ
ムレ
ムレ
ムレ
ムレ
むあぁぁぁぁ

二人分の匂いはキクでしょう？……？阿良々木くんもしかして…
あなた勃起してるの？こんな私達の臭い足の匂い嗅いで勃起してるんだ？
もん
もん
もん
もん
もん
しょうがないわよ羽川さん…阿良々木くんは超が付く変態だもの…
ほら許可してあげるから私達の足の匂いをオカズに自慰してみなさい。

うわぁ…ホントに自分でシコシコし始めちゃった…
そんなに私達の足の匂いを深呼吸するみたいに嗅いで興奮してるの？
阿良々木くんもしイクなら『僕は女子○生二人の臭い足の匂いで興奮して射精しちゃう変態です』って言いながら射精しなさい。これは命令よ！
ムンッ
ムンッ
ムンッ
ムンッ
シコ
シコ
シコ
シコ
シコ

ドピュッ
ビュルルッ

ホントにイっちゃったね阿良々木くん…臭い足の匂いをオカズに
皮被りの童貞おちんちんシコシコするの気持ちよかったの？ねぇ？
うっとり顔で私達の足の匂いを嗅ぐ阿良々木くん
最高に気持ち悪かったわよ…さぁ次はどうしようかしら…

阿良々木くんまた勃起してるの？
ほら戦場ヶ原さんと膝でサンドイッチしてあげるね♥
阿良々木くんの大好きな乳首もイジってあげる♥
ダメ…パンツは脱がせてあげない…
あら…抵抗しても無駄よ阿良々木くん
その気になればこのままあなたの
後生大事にしている童貞チンポが
潰れる事になるわよ？ふふ…
なんだかんだ言っても…体は正直ね…♥
コリ
クニ
ゴリ♥
グリ♥

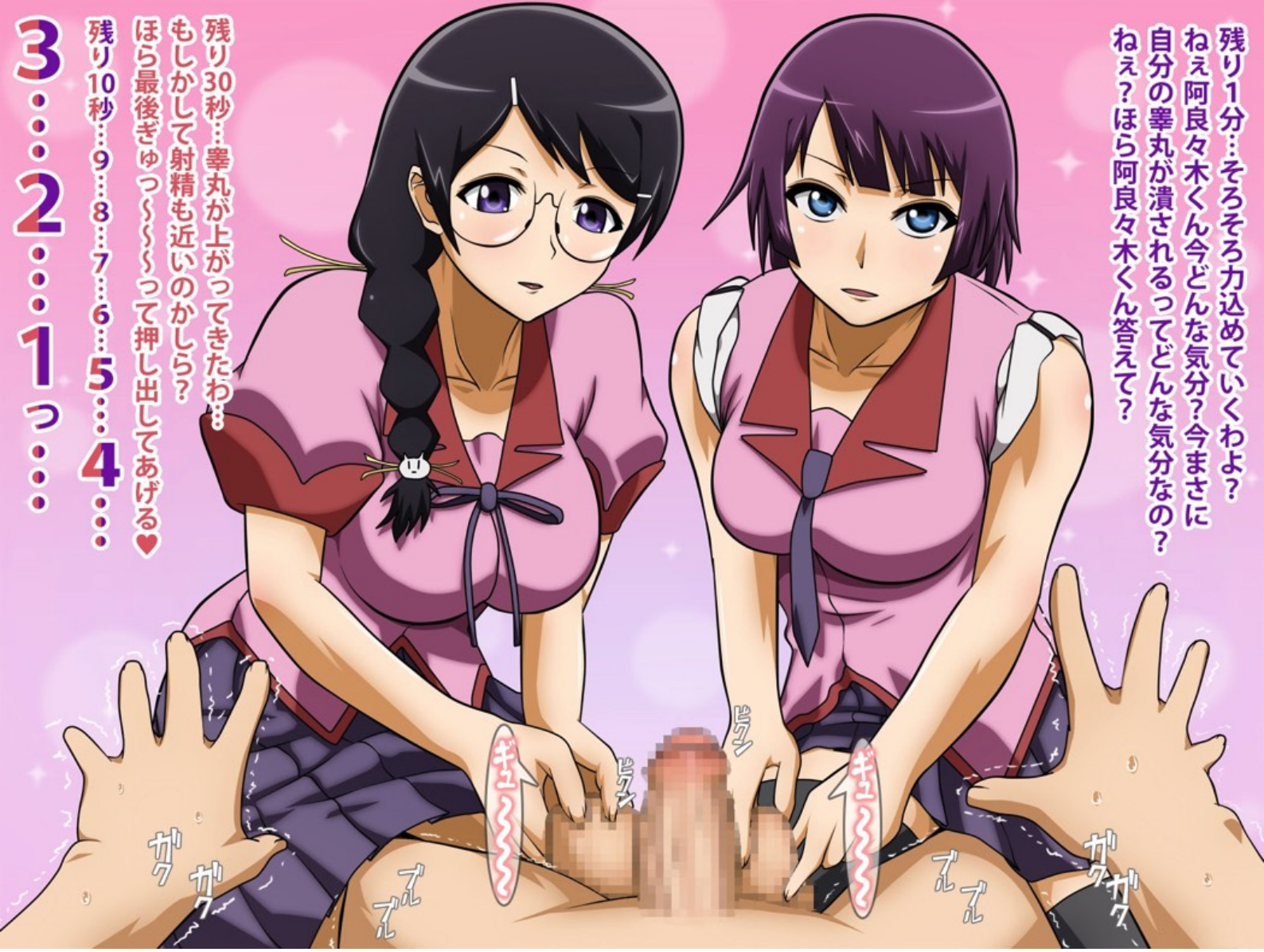
ほら阿良々木くんどうなの？私達に膝で挟まれてシコシコしてもらうの気持ち良いの？ねぇ？膝でコカれて感じるなんて変態だよね？
（変態…変態…変態…変態…変態っ…変態っ！）
阿良々木くん男の子なのに乳首勃起させて感じてるの？この変態ゴミムシ…
阿良々木くんみたいな変態は膝でコカれてイクのがお似合いよ…このまま不様にパンツの中に射精しちゃいなさい！ほらイケっ！
プル
プル
ボン…
ボン…
プル
ゴリ
ゴリ
クニ
クニ
シコ
シコ
シコ
シコ
シコ

イケっ…パンツの中で精子出しちゃえ…
ほらドピュドピュ…ピュッピュ～
ふふ♥阿良々木くん膝の間で
ビクンビクンって射精してるわよ…
ほら全部出しちゃいなさい…
膝で挟まれてシコシコされて
イっちゃうド変態の阿良々木くん♥
ビクッ
ドプッ
ドプ
ブピュ

ほら?どう?膝でコキコキされて射精するの気持ちよかったの?ねぇ答えて…
パンツが精子まみれになっちゃったわね…阿良々木くんそれ脱いでそこに仰向けになりなさい…は?大丈夫よ…まだ出るわ阿良々木くん…私達が強制的にまた射精に導いてあげるから安心なさい…
ハァ
ハァ
ハァ
ゴリ
クニ
ドク
ドク
ゴリ
ゴリ
ガク
ガク
ガク
ガク
ガク

これが阿良々木くんの睾丸ね…こんな小さなものに
男のプライドと尊厳が詰まってるかと思うと悲しくなるわね。
ねぇ羽川さん……コレ……いっその事
潰してしまうというのはどうかしら？
ふふ戦場ヶ原さん…
いくらなんでも無条件じゃ可哀想だから
もし『3分以内に玉責めだけで射精できなかったら？』
という事にしない？出来なかったら……潰しましょう♥
羽川さんは優しいわね…いいわ。そういうことにしましょう。
阿良々木くんわかったわね。冗談じゃないから頑張りなさい。
はい…じゃあ…スタートっ
!?
クニ
グニ

残り3分…あら…顔が真っ青よ阿良々木くん？
変な汗もかいてるし…そんな悠長にしてて大丈夫かしら？
阿良々木くんの大事なモノが刻一刻と
断頭台に向かっているのよ？
残り2分…ほら阿良々木くん頑張りなさい…
頑張ればきっと出来るわ…自分を信じて♥
ダメ！暴れないの！私達二人が足でガッチリ掴んでるから
逃げるなんて無理だよ？ほら…タマタマをコリコリって…
気持ち良いでしょ？……でもなかなか射精感にならなくてヤキモキする？
でもほら…こうやって…精子を押し出すようにして…♥
コリ
グニ
コリ
コリ
コリ
プルプル
グニ
グニ
プルプル


残り1分…そろそろ力込めていくわよ？
ねぇ阿良々木くん今どんな気分？今まさに
自分の睾丸が潰されるってどんな気分なの？
ねぇ？ほら阿良々木くん答えて？
残り30秒…睾丸が上がってきたわ…
もしかして射精も近いのかしら？
ほら最後ぎゅっ～～～って押し出してあげる♥
残り10秒…9…8…7…6…5…4…
3…2…1っ…
ギュ～～～
ギュ～～～
ビクン
ビクン
ガク
ガク
ブル
ブル
ガク
ガク
ブル
ブル

「ぅぅぅぅぅっっ」
ドピュッ
ビュルルッ
ギュ〜〜〜
ビクン
ビクン
ガクガク
ガクガク

あら…イッた瞬間に泡吹いて気絶しちゃったわ…
もうちょっとだったのに…残念…
すごい気絶しても体って痙攣するのね…
ビクンビクンしてる…そんなに玉責めが良かったのかしら…
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン

気絶して見た夢のオチが
また気絶させられる…という
ループオチのような事になった…
起きた時には汗びっしょりで夢精してた……
アレだけ絞りとられたのに…
僕はひどい自己嫌悪で数分間呆然としていた。
……
そして数日後ついに『その日』はやってきた…

「SEXするわよ阿良々木くん」
「。。。。。。。」
「何よ…嫌なの？それとも先日の事？」
「違う…この前は僕が全面的に悪かった」
「ならいいわね…服を脱ぎなさい」
……。
うーん…なんだろうなこの淡々とした感じ…
怒ってるわけでも無さそうなんだが…
やっぱり戦場ヶ原緊張してるのかな？
いや僕の方が緊張しすぎて変に意識してるだけかな…

躊躇いなく裸になる戦場ヶ原。

『なによ阿良々木くんそんな動揺して…前にも見た事あるじゃない』

『う…いや…そう…だけど…』

確かに戦場ヶ原の裸は一度だけ見たことあるんだけど一瞬だったしな…

やっぱ綺麗だ戦場ヶ原…うわぁ…こんな綺麗な女の子と今からSEXするんだ…ちゃんと勃つかな…緊張してきた…いや落ち着け僕…

軽くキスした後ベッドに優しく倒すと戦場ヶ原の体がわずかに震えているのがわかった。
「戦場ヶ原…怖いのか？そんな怖いなら別に僕は…」
「阿良々木くん…えぇ…怖いわ……だから…だから…うんと優しく私を抱きなさい」
戦場ヶ原は過去に男に乱暴をされかけた事がトラウマになっている。
気丈に振舞っているようで戦場ヶ原も普通のか弱い女の子なんだ…
「戦場ヶ原大丈夫だ僕を信じてくれ！僕は君を世界一愛しているんだから僕は決して君を傷つけるような事はしない！」
ギュ
ギュ
ビク
ビク

「ふふ♥えぇ…阿良々木くん
私もよ…だから大丈夫…」
「…うん……じゃ…じゃあ
入れるよ…戦場ヶ原」
「えぇ…来て…」
僕ももちろん初めてだけど、
戦場ヶ原に安心して
もらえるように
僕がリードしないと…
ドキッ
ドキッ
ドキッ
ビクッ
ビクッ
位置を確認してゆっくりと挿入を開始する…

「んんっ！」
ゆっくりと戦場ヶ原の膣内に挿入していく
「ん…ふぅ…んん…」
やっぱり痛そうだ…ゆっくり…ゆっくり…
「大丈夫か…戦場ヶ原」
「ええ…大丈夫…だから…動いて…いいわよ…」
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ん。
ん。
ズプッ

ん？そういえば生で挿入しちゃったな…外に出せばいいか…
「阿良々木くん…ダメよ」
「……？」
「膣内に出しなさい」
「いや戦場ヶ原それは…」
「大丈夫だから…膣内に出しなさい」
「……わかったよ戦場ヶ原」
プル
ギシ
パン
ペペ
ギシ
パン

あぁ…俺今戦場ヶ原とSEXしてるんだな…
「……戦場ヶ原…本当に…出す…ぞ」
「はっ…ん…はぁ……えぇ……いいわ…出して…」
「くっ…イクぞ…膣内に出すぞ…」
「阿良々木くん膣内にいっぱい出して♥」
ギシギシ
パン
パン
パン
パン

「っっっっ♥♥♥」
戦場ヶ原の体が強く反応する。
数日溜めた精子が戦場ヶ原の膣内に注がれていく。
ドクッ
ドクッ
ドピッ
ドピッ
ぎゅ
ぎゅ

「はぁはぁ…阿良々木くん…どう？」
「え……？」
「私の膣内は気持ち良かったかしら？」
「うん…それはもちろん…それより戦場ヶ原は大丈夫か？痛くないか？」
「そうね…少し痛むけど問題無いわ…」
「……そうか」
プルプル
プルプル
ドク
ドク

「たくさん出たわね…♥」
「う…ごめん…」
「いいのよ私がお願いしたのだから…それにもし子供が出来ても後悔は無いわ…」
「うん…僕もだ…戦場ヶ原」
「ねぇ阿良々木くん…」
「ん?」
「まだ出来るでしょ?」
プルプル
プルプル
ビクッ
ビクッ

程無く再び戦場ヶ原と一つとなる。
「ん…んん…阿良々木…くん…んん♥」
戦場ヶ原の舌が僕の口内に侵入してくる。
互いの気持ちを探るように舌を絡め合う。
ちゅ
ちゅ
ギシ
ギシ

戦場ヶ原と目が合う。
言葉は交わさなくても戦場ヶ原の気持ちが伝わる。
戦場ヶ原を抱きかかえていると、とても華奢な体なのがわかる。
僕は愛おしさのあまり強く抱きしめると呼応するように戦場ヶ原も
僕を抱き寄せ、戦場ヶ原の膣内が熱くうねるように締め付ける。
ん♡
ん♡
ん♡
ちゅ
ちゅ
ギシ
ギシ
ギシ
ギシ

僕も限界が近づき速度を加速させていく。
「んん…阿良々木くん…このまま膣内に出して…♥」
「うん…このまま膣内に出すよ戦場ヶ原っ！」
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
パン
パン
パン
パン
パン
ギシ
ギシ
グポッ
クチュッ

「あっっ♥♥♥♥」
ギッ♥
ビクン
ビクン
ギッ♥
ドピュッ
ビュルルッ
ギシィィ
ビュク
ドクン

この後もどのぐらいしたか記憶が無いぐらいに
戦場ヶ原を抱いた。お互いの体力が続くかぎり…
僕らの忘れられない初体験はこうして幕を降ろした…。

後日談というか、今回のオチ。

あれほど貞操観念が高く身持ちが堅かった戦場ヶ原だが、
今やそんな事あったか忘れてしまいそうなほどに
戦場ヶ原は頻繁にHを求めるようになった。
「阿良々木くん入れるわよ…」
「戦場ヶ原…もうさすがに休ませて…」
「なによ3回ぐらいで…まだ勃ってるし
大丈夫よ阿良々木くん」
まぁ元々身持ちの硬さは性格ではなく、
過去の出来事が原因の病的なものだったから
こうなるのも予想出来なくはなかったけど。
うん…いやでも――これはこれで幸せなのかもしれない。
ん♡
ズプッ
ギシ

「戦場ヶ原っ…そ…そんな激しく…」
「気持ちいい？」
「う……き…気持ちいいです…」
「そう…私も気持ち良いわ阿良々木くん♥」
「イ……イキそうですガハラさん…」
「相変わらずキリン並に早漏ね阿良々木くん…
いいわ…許可してあげるからいっぱいイキなさい♥」
パン
パン
パン
ギシ
ギシ
ギシ
ギシ

「イクっっ！戦場ヶ原！」
んんっ♥
♥
ドピュッ
ビュルルッ
ドピッ
ビクン

「はぁ…はぁ…」
「たくさん出たわね…阿良々木くん♥」
「さすがにもう…出…」
「あと3回ね♥」
前言撤回。
僕はやっぱり死ぬかもしれない。
END